
十字架背負う花天使達（過去外伝）

蓮千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十字架背負う花天使達（過去外伝）

【NNコード】

N4697A

【作者名】

蓮千里

【あらすじ】

まだディックが脱獄したてのとき、最初に会ったのがジルとクルル。この時から、運命の歯車は回り始めたかも知れない。

(前書き)

何でも見えていたジルとクルル。
脱獄したティック。

彼等が出会わなければ、お話は別物に変わっていたのかもしない。

「あつちだー！」

『あつたー！』

ここから抜けることが出来る『抜け道』を。

俺は探した。記憶をたどって。

はあつはあつ……はあつ……

闇に包まれた町に灯が交差する。

『ひつじこあつたはずだ……』

はあつはあつ……

プリメット裏街道の者達の声が。『自分』を追つている。

あちこちで声がする。

『逃がすなー！』裏切り者をー！

俺が見つけたときと裏街道の住人が駆けつけた時間は同じだった、
が。

「『紅炎』！！」

俺はリーナスを高めて、奴等に向けて炎をぶちまける

* * * *

「おい、『ブルー・ジプソフライラ』からも生まれたぞ！」

「『ヒーヒは』『カメリア』と『アニユマル・ポインセチア』から

同時に生まれた！初めての双子だ！！」

「サンフラワーからも生まれたぞー！」

自分達のほかにも、花天使が生まれているよつだ。

少年少女は『声がより強い場所』にやつってきた。

目の前に広がるのは湖。

「今生まれてる子達は同期だよ。君達の」

ひとりの男が2人に近づいてきた。

「君達は　　」

「結婚してるんだね、あんた」

突然、少年が口を開く。 それも、全く関係のないことを。

『なんなんだ？』コイツ　　』

少年の目は、次々と生まれる子供達を見ていた。

『な、何で知ってるんだ？俺、話したか？？』

困惑する男の声が2人の頭に響き渡る。

「……頭痛いねえジル～」

少年の名はジル・パーシカリア。

少女の名はクルル・パーシカリア。 タテより生まれし者達。

このときの彼等はまだコントロールできなかつた。

聞きたくないものを聞いて、見たくないものを見てしまつ。

生まれつきの能力。

「…………が、プリメット…………？」

背後からの声。

2人は驚いて振り向くと、ひとりの少年が立っていた。

『なんなんだ……？この人……』

思わず2人は後ずさりした。

『思考が読めない？！』

「ああ。そつか『俺の思考が読めないから』驚いてるのか」

少年はポンと手を叩いてひとりで納得する。

「…………」

「俺の思考は『当分』読めないはずだよ。俺は今来たばかりだから」

悲しげに少年は呟いた。

「俺の名前は『ディック・クローバー』よろしくな

よくわからない。

だけど、『悪い人』には見えない。感じない。

ジルとクルルは『淋しげに』笑い、手をさしのべるディックの手を握った。

それから数日後

彼はティアラとイングルの兄となっていた。

「ティアラ！ イングル！ 起きろ！」

ディックが妹と弟を起こしにやつてきた。

「 「ふあふおふいっふん……（後一分、……）」 「

2人して同じ事を言い、再度眠りにつく。

「……」

毎朝同じ事なので、これ以上何も言わない。

「 そろそろだな」

ディックは咳き、簡単な朝ご飯をテーブルにのせる。

ティアラ達の朝食を作つとかなければ、後が恐ろしい。

とりあえず、今日も自分の力では起させそつもないので、

起きることは『第二者達』に任せることにした。

彼等はこの時間に必ず来るのだから。

「 戰闘すつべーー。」

サンフランコワーよつて元氣のいいクリスの声。

「 おきてるー? 2人ともー。」

「早く降りてきなよー！」

アメリカより生まれし者、セラファインとポインセチアより生まれし者のハシスの声が見事に揃つ。

プリメット始まって以来、初めての双子。

「やあ、時間通りだね」

俺は第二者達に姿を見せる。

「…………こつになつたら自分達でおきりれるようになるかな

こめかみを抑えるジルと、ため息をつくクルル。

生まれながらの能力で、何でも見えてしまう二人。

自分の正体を知っている子供達。

そして、多分何もかも分かつているはずだ。

俺の気持ちに。

「……………」

「おはようー。いい天氣だねー。」

「いや、早起きはこいねえ。うんづん」

ティアラとイングルがダッシュで朝食を終え、玄関へ飛び出してくる。

「……………今、おきたんだろーが！」

「こちいち五月蠅いなあーあたしは朝が苦手なのーー。」

ティアラとクリスの間で火花が飛ぶ。

「ティアラ、イングル。起こしてもうつておいて、ぬけぬけと台詞を言わないよ」に

セラフインがにっこりして2人を交互に見、注意する。

「……とにかく行つてきます~」

「夕飯はパスタがいい! 行つてくるなーー!」

ティアラとイングルはリーナス向上練習に出かけた。

「はいはい、いってらっしゃい」

苦笑しながら俺は2人を見送る。

「何とでもいえよ、ジル。俺は間違ったことはしていないぜ？」

見送った時、ジルと目が合つた。

その瞳は何かいいたげな色をしていた。

この言葉は、それにたいする答え。

「お前の想像通りだよ、ジル・パーシカリア」

風がディックを通り過ぎる。

小鳥が鳴いている。

「俺はティアラが好きなんだよ……『妹』なのに、ね

彼の告白を聞くものは誰もいない。

「クルル」

ジルは対の存在を呼び止める。

「どうしたの？ジル

中間達より遅く歩いていたジルは、クルルだけに言つておきたかった。

風が2人の間をすり抜ける。

「ティックの気持ち、誰にも言つなよ。」

ゆづくと慎重に言つジル。

「何のことかと思えば」

クルルが伸びをしながら田を開じる。

「……ティアラ達はいつ知ることになるんだろうな。この事実を

ジルは空に田をやり問い合わせる。

「さあね。問題があがめるし、わかんないけど」

クルルは田を開けながらジルの問いに答える。

「少なくとも、覚えときやなくちゃいけないんじゃない?『私達は』

「

平和だったプリメットに

暗雲が漂い始めるのは

もう少し先の話

(後書き)

背景描写が足りないですが、プリメット時代のことを書いてみました。

これも3部作構成になっています。次回は未来編です。

また、お会いできることを祈りながら……

Rue

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4697a/>

十字架背負う花天使達（過去外伝）

2011年1月19日01時26分発行